

平成28年2月

常城朱乃 学位論文審査要旨

主査 千 酌 浩 樹

副主査 藤 井 潤

同 景 山 誠 二

主論文

Reduced replication capacity of influenza A(H1N1)pdm09 virus during the 2010–2011 winter season in Tottori, Japan

(鳥取県における2010–2011年冬季のインフルエンザウイルスA(H1N1)pdm09増殖能の低下)

(著者：常城朱乃、板垣朝夫、土江秀明、徳原美聡、岡田隆好、奈良井栄、笠木正明、

田中清、景山誠二)

平成25年 Journal of Medical Virology 85巻 1871頁～1877頁

参考論文

1. Frequent isolations of influenza A viruses (H1N1) pdm09 with identical hemagglutinin sequences for more than three months in Japan

(日本において3ヶ月以上同一のヘマグルチニン遺伝子配列であるインフルエンザA(H1N1)pdm09の度重なる分離)

(著者：吉田優、常城朱乃、板垣朝夫、土江秀明、岡田隆好、奈良井栄、笠木正明、

田中清、井東朗子、領家和男、景山誠二)

平成27年 Yonago Acta medica 58巻 165頁～171頁

2. Possible HIV transmission modes among at-risk groups at an early epidemic stage in the Philippines

(フィリピンにおける早期流行段階でのリスク集団内で起こりうるHIV伝播様式)

(著者：Elizabeth Freda O. Telan、Genesis May J. Samonte、Noel Palaypayon、

Ilya P. Abellanos-Tac-An、Prisca Susan A. Leñaño、常城朱乃、景山誠二)

平成25年 Journal of Medical Virology 85巻 2057頁～2064頁

審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、2009年に発生した新型インフルエンザウイルスA(H1N1)pdm09亜型の増殖能の変化に言及したものである。2009年から2011年にかけて鳥取県の医療機関を受診したインフルエンザ患者(1,038例)の鼻汁よりウイルスを分離し、ヘマグルチニン遺伝子配列を系統樹上に展開した。他方、MDCK細胞に40株を感染させ、72時間後のウイルス産生量を増殖能として評価した。その結果、異なる増殖能を持つ多様な株が存在すること、新型流行時には、増殖能の高いウイルス株ばかりが単独伝播していたこと、その後、増殖能は低下し、他の亜型と混在して伝播したことを報告している。本論文の内容は、増殖能評価が流行動向の解析項目として必要不可欠であることを示しており、日常診療や政策決定に重要な資料となった。明らかに感染症対策の分野における学術水準を高めたものと認める。